

小田実全集（小説 第37巻）

深い音



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

女はまだ生きています	6
野戦病院	16
この世のことはこの世のこと	25
ブンカにひとりですんで住んでいた男	35
「無用の長物」が逃げたあと	48
震災前夜	61
忙しい共同生活	71
親切でアホウなボーイ・フレンド	84
似合いの茶飲み友だち	96
ひつつめ髪の女	105
これで役者は全員そろった	113

瓦礫の墓

復興都市再開発計画

一種の戦友

サカリのついたゴリラの到来

お多福顔の告白

薬を拒む男、「濁貧」の男

孤独死にいちばん近いところ

わたしが殺した女

それで、わしらは今、ここに、こうしている

「する」

戦友が死んだ

123

135

152

163

181

196

204

216

230

241

254

深い音

女はまだ生きています

今はおうめつきり見かけないようにりましたが、昔は街なかの大きな果物屋には、お店の奥にお店の果物をジュースにして飲ませてくれるフルーツ・パーラーがあるものでした。わたしの子供の時代、いや、もう少し年をとって年ごろの娘になったころまであった。

薄暗いし狭苦しい、どのお店に行ってもその感じがつきまとう喫茶店とはちがうて、季節の色とりどりの果物を並べた果物屋の店先から奥へ入ると、そこがガラス扉ひとつで仕切られたフルーツ・パーラーで、なかは外の街路の光がそのままふんだんに入ってきて来て、めつぼう明るい。フルーツ・パーラーのお店のすみずみまで光が行きわたっている感じで、その感じのせいとか、実際にはたいして広くもないのに、フルーツ・パーラーはどこのお店でもひろびろとして見えていました。ひろびろとして、明るい、そう言うてよかったかと思う。

そこには喫茶店にあるようなふかふかしたソファまがいの椅子はなかったし、背の高いボックス席などまったくなかった。椅子はたいいていのお店でアルミのパイプ脚の折り畳み椅子のお手軽なものなら、テーブルはテーブルでツルツル表面が光るデコラ板の長方形のテーブルでした。客も、コーヒー一杯で二時間も三時間も深刻ぶった顔でねばる名曲喫茶の学生さんのような客は来ていなかったし、煙草の煙を濛々とあげて海千山千の商談を声高にやつてのける商人連中あきんどもいなかった。たいいていが仕事のあいまに「当店特製」のフルーツ・ジュースを飲みに来る近所の会社のサラリーマンや女事務

員でなかったなら、学校の帰りに連れ立ってにぎやかにやって来る女子高生の群れ。もちろん、多いのは家族連れで、休日には、彼らでフルーツ・パーラーのひろびろとして明るいお店はいっぱいになる。お母さんがアルミのパイプ脚の折り畳み椅子に行儀よく坐つて、黄色のオレンジ・ジュースを上品に飲んでいた。長方形のテーブルのむこうにお母さんとむかいあわせに坐つた上の男の子は、その子の真つ赤な頬つぺたにふさわしく赤いイチゴ・ジュースでした。男の子の横では下の女の子が淡いピンクの入った白桃の白いジュース。それとも淡いバナナ・ベースのミックス・ジュースやつたかも知れない。

女の子はお澄まし顔で、丈の高いグラスに入ったその白いジュースをストローの音をジュウジュウわざと大きくさせて飲んでみせた。お母さんはしかめ面をして（これ）というふうにな女の子をにらんでみせるが、女の子はどうせお母さんは他の客がいることやから声をあげて叱つたりはしないとタカをくくつて、さらに大きくストローの音をたてると、そのうち、それまで静かに飲んでいた横のお兄ちゃんまでが妹の真似をしてジュウジュウ飲みをやり始める。お母さんはいつそうしかめ面をして男の子にもにらみつけ始めますが、眼は笑っている。そのうちこらえきれなくなつたようにお母さんはほんとうに笑い出してしまった。お母さんだけが笑い出したのやなかつた。二人の子供も笑い出していたし、その心あたたまる光景を何んということもなくそれまで眺めていたまわりの客もつられて笑い出していた。それほど、その笑顔は、まだまだ若いお母さんをふくめて愛らしいものに見えていました。ひろびろとして、明るいフルーツ・パーラーのなかでのことやつた、すべては。

それから足もとが大きく、激しく揺れ出した。足もとの直下深く大地がゆらぎ、割れ、裂け、ゴウツという深い音はその裂けた地の底からした。そう聞こえて来た。

一瞬のうちには万物崩壊、落下が始まっていました。フルーツ・パーラーの天井が、天井の上の重い屋根が、屋根を支える太い梁が、まわりの壁が崩壊、落下して来て、三人のからだの上に、他の客のからだの上に轟音をたてて覆いかぶさる。光は消え、暗黒が来た。もうどこにもあのひろびろとした明るさはない。すべてが瞬時のことでした。誰にも悲鳴をあげる時間さえなかった。あげたところで、万物崩壊、落下のなかでかき消されていた。

三人は、また他の客は、そのあと、どうなったか。いくつも事態の進展を考えることができません。ひとつは、即死。そのとき万物崩壊、落下の下で死んだ何百人、何千人といっしょに彼らも死んだ。それは十分に考えられることです。あるいは、重い屋根にしる太い梁にしる壁にしる、その他コンクリートの塊、鉄骨、鉄材、あまたの倒壊物の下で即死を免かれたあと生き埋めになって生きのびる。その場合でも自力でなんとか瓦礫の堆積のあいだのすき間を見つけて脱出するという幸運な事例もあるでしょうし、運よく発見されて救出されることもある。しかし、自力で脱出できず、発見、救出もされないまま、生き埋めになったまま、息絶えるという事態もいくらでもあり得る。あるいは、地震の直後に必ずと言っていいほど起こる火災が燃えひろがるなかで生きながら焼かれる——その場合も、あり得ないことではない。

わたしも足もとが大きく、激しく揺れ始めたのを感じとった人間のひとりでした。いや、そのとき

には、午前五時四十六分という未明の時刻でしたのですが、わたしはまだ寢床のなかにいた。ただ、眼は覚ましていました。ふだんなら、わたしは早起きのほうなのですが、いくらなんでもそんな早い時刻にはまだ眼を覚ましていません。それが、それこそ虫が知らしたと言うものでしょうか、その日は、わたしは大地が揺らぎ出すまさに直前に眼を覚ましていました。眼を覚まして、寢床のなかで、さてどうしようか、起きてしまおうかと考えた。その一瞬に、まだ横になっていたわたしの背中の下で大地が大きく、激しく揺れ始めた。はじめ大きく上下動、下の寝台ごとわたしの全身は浮き上ったかと思うと、これも大きな横揺れ、ついでまた激しい上下動。このあたりまで、わたしは記憶している。そのあと、万物崩壊、落下の落下物で頭を激しく打ったにちがいありません。わたしは意識を失うたので、あと記憶はない。ただ、意識を失なう直前、わたしはゴウツという地の底からの、そうとしか思えない深い音をたしかに聞きました。その記憶はあとまで明瞭に耳に残った。

もうひとつ言うと、わたしは最初の上下動が始まったとき、「地震だ」と自分で自分に叫びながら（自分の声でないような異様な声が出ていました。わたしはこれもよく憶えています）、背中を大きく翼でもひろげるように突っぱらせていた。もし立っていたなら、足もとがゆらぎ出したとき、わたしはぎつと精いつぱい足を踏んばっていたのにちがいありませんが、背中の中突っぱりにしろ、足の踏んばりにしろ、わたしはそれで大地の大きい、激しいゆらぎを受けとめようとしていたにちがいありません。そんな人間ひとり、それも女ひとりの突っぱりやら踏んばりやらで、そのゆらぎの一瞬に六千五百人近くを即死させていた巨大な地震を受けとめ得るはずはありませんが、それでもわたしは懸命に背中を突っぱらせていた。そのこともわたしはわたしの記憶のヒダのなかに明瞭にとどめている。

その背中を懸命に突っぱらせたわたしのからだの上に、たちまちわたしの住居の古びた借家の平屋の屋根やら太い梁やらが天井板もろとも落下して覆いかぶさって来た。そのときわたしがぶ厚いかけブトンをかからだの上にかけていなかったら、わたしは即座に圧死していたのではないかと思います。それにわたしの寝台は、わたしの家に来る客に「何んで、こんな骨董品みたいな古くさいベッドに寝てはりますねん」とよく言われる、いつか古道具屋で見つけて強引に値切って買った鉄製のワクと脚のついた時代物の寝台で、その鉄製の脚が強かったせいか、寝台はもちろんつぶれましたが、いびつに壊れてくれて、それだけからだは動く、動けるすき間ができていました。すくなくともこれで息ができた。しかし、身動きは、下半身がそこに落ちて来た太い梁にがっちりはさみ込まれてできませんでした。まして、下半身をひっぱり出すことなどまったくできない。

しかし、そうしたことはすべてあとで判ったことです。何がぶつかって来たのか判断はあとになってもつきませんでした。わたしはさつきも言いました通り万物崩壊、落下の落下物に頭を強打されて気を失なってしまったから、そのときには何がどうなっていたのか、まるつきり判っていません。それからわたしはおよそ十二時間落下物の瓦礫の堆積の下で生き埋めになっていたのですが、かえってよかつたのは、そのあいだ、大半の時間、わたしが意識を失なっていたことです。わたしがそういうのは、意識を取り戻したあとの恐怖と不安にさいなまれた時間の長さのことを考えるからですが、わたしは暗闇のなかでからだをなんとか動かそうとして必死になっていた。しかし、下半身が太

い梁にはさみ込まれていて身動きならない。わたしは、なぜ、自分が地震が始まったとき、即死しなかったのかと考え始めていました。あのとき即死していれば、この暗闇のなかで苦しんでいることもないのです。わたしは激しく悔んでいた。このまま、生き埋めになったまま、誰に見つけられることもなく死んで行くのは、何より耐えがたいことでした。わたしは必死に叫び始めていた。誰か助けて下さい、誰か助けて下さい、ここに生き埋めになった人間がいます、女がいます、人間はまだ生きています、女はまだ生きています。わたしは泣きながら叫んでいました。

そのうちわたしの意識はまた薄れ始めた。叫びは緩慢になり、間遠になつていた。それは自分でもよく判つていましたが、どうにもならない。眠うなつて来ていました。無限に眠い。自分のからだから次第に自分が離れて行く。どこか遠いところの一点めがけて、動いて行く。ああ、これでわたしはもう死んで行くのや、と思うた。眠つたらアカン、雪の山のなかで人が凍死するときにはこうなるんや。眠つたらアカン、アカンと自分で自分に言うていたのですが、その声も遠くなつて行く。わたしはいつのまにかしきりにお経の文句を口ずさんでいました。わたしの別れた夫の古谷の母親、つまり、わたしのそのころのおシュウトメさんが古谷の家の誇りやというアホみたいに大きい仏壇のまえて毎朝大声であげてはつたお経の文句です。あれはハンニヤシンギョウというものでしたか、そのころはわたしはあれがいやで、それが古谷との離婚の原因のひとつになつたと言うて言えないこともないほどにかくいややつたあのお経の文句、毎日聞かされていたものですからわたしの記憶のヒダのなかに組み込まれていたのにちがいない、それが自然に口からズルズル出て来た。お経の文句をとなえたとするものやない。いつも聞いている歌を口ずさむみたいに、わたしは自然にお経を口ずさんで、ホ

トケさん、神さん、誰でもよい、自分を救うて下さい、死なさんで下さい、と必死にわたしは心のかで言うていました。しかし、その反面、もうこのまま死んでもよい、死なせて下さいとも、わたしは、それこそホトケさん、神さんにも言うていた。

そのときでした、奇妙なことが起つたのは。あとから考えれば、昔聞き憶えたお経の文句を口ずさむことで昔の記憶が喚起されたのやと思うのですが、それともわたしがべつに信心したこともないホトケさんや神さんがわたしのお経の口ずさみで憐れんでくれはつたのか、眼のまえがスウツと明るうなつたと思うたら、そのまま明るい、ひろびろとして明るかつたフルーツ・パーラーの場面が出て来ました。その場面は、たぶん、それまでのわたしの人生のなかでいつか出くわして見たことのある、ひろびろとして明るかつたフルーツ・パーラーのなかでの二人の子供とお母さんの愛くるしい場面がよほど印象に残つて、それがそのまま記憶のヒダの奥底にしまい込まれて残されて来ていたのです。うか、瓦礫の山の下の真つ暗闇のなかでわたしはさらに刻明に場面を見ようとして思わず眼を閉じていた。そのおかげで、わたしは場面の細部をそこでフルーツ・ジュースを飲んでいた三人の姿かつたう、お母さんのしかめ面、上の男の子の真つ赤な頬つた、ストローのジュウジュウ飲みでふざけていた下の女の子のお澄まし顔、いや、その三人の姿から始まつてアルミのパイプ脚の折り畳み椅子や表面がツルツル光るデコラ板のテーブルのかたちまでがありありと見えて来た。

そこでふしぎやつたのは、フルーツ・パーラーの場面の細部に至るまでが見えて来たことで、わたしが生き埋めの真つ暗闇のなかでまるつきり失なつてしもうていたわたしの地震が来るまえのふだんの暮らしとわたしがつながつたのでしょうか。それまでにない心のやすらぎ、そこまで言えば言います

ぎかも知れませんが、何かホツとしたものを心のなかに感じとつたことでした。

それでわたしはわれに返つたような気がします。われに返つたからこそ、わたしは次の瞬間瓦礫の山のどこからか洩れ出て来たかすかな煙の臭い、はるか遠くでパチパチと物がはじける、いや、あきらかに物が焼ける小さな音を聞きとつた。聞きとることができた。それと同時に、いや、その一瞬まででしょうか、わたしの眼から、フルーツ・パーラーのひろびろとして明るい、明るかった場面は全体が激しく揺れ動いてかき消すように消えてしもうていた。場面のなかの二人の子供とお母さんの三人の姿も、もちろん、消えていました。

はじめはよく判らないままで、わたしは煙の臭いを嗅ぎ、遠くからの音を聞いていたのやと思えます。わたしの疲れ果てた、薄ぼんやりした心のなかで、二つはまったく別ものとしてありました。そのうち、突然、二つは結びつき、二つは別々のものやない、ひとつのものやと気がついた。わたしはからだをふるわせた。火が出たのや、出ているのや。そのことばはわたしの全身を貫き通した。このままやと、わたしは生きながら焼かれる。焼き殺される。

それまでもわたしは、このまま生き埋めになつたままで、誰に見つけられることもなく死ぬという恐怖と不安にさいなまれて来ていました。しかし、今は生きながら焼かれる。この恐怖と不安には、やはり、それまでの恐怖と不安とはちごうたものがあつたように思います。何かしらそこには言いようのないおぞましいものがありました。人間のものでないおぞましいものです。人間の死にあつてはならないおぞましいものです。そうしたものであつたからこそ、中世の魔女裁判では火あぶりの刑を魔女に科した。

わたしはまた声をかぎりに叫び始めていました。さつきと同じ叫びです。誰か助けて下さい、誰か助けて下さい、ここに生き埋めになっている人間がいます、女がいます、人間はまだ生きています、女はまだ生きています。

さつきとまったく同じ文句でした。昔よく言っていたセリフに、すり切れたレコードみたいに同じ文句をくり返しとるといのがあった。わたしはそのセリフそのままにもう頭のなかにすっかり組み込まれてしまうて、他に言いようのないようになってしまった文句を泣きながら叫んでいたのですが、それでもさつきよりは力が入っていました。自分でもそう思うのですが、その力はたとえなげなしのものであっても、さつき見たフルーツ・パーラーのひろびろとして明るい、明るかった場面を見た、それを眼を閉じて細部に至るまで見ていたときの心のなかに出て来たやすらぎ、ホッとした一瞬から来たものであったように思います。

わたしは、そのうち、その明るい場面に出て来た、しかし、次の瞬間、偶然、万物崩壊、落下の瓦礫の山の下で生き埋めになって今やわたし同様生きながら焼かれようとしている二人の子供、お母さんの三人がわたしのうしろで同じように必死になって、たとえすり切れたレコードの文句であろうと、同じ助けを求める叫びを必死にあげているように思いました。死にかかっているひとりひとりの声は小さい、それこそ蚊の泣くようなものであったにちがいませんが、それでもわたしプラス三人の四人の声はわたしひとりの声よりは大きくて、おたがいの上にあった屋根やら屋根を支える梁やらその下の天井板やら壁やらの堆積を突き破って、いや、そんなことはできたはずはありません、そこにあつた釘の穴ほどのすき間から這い出るようにして外に出た。

わたしはあとで思い出して、いつもそう思うた。

「あなたの声はほんまに蚊の泣くような声やったで。それでもとにかく聞こえて来たんや。わしの耳にも孫の耳にもとにかく聞こえて来た。」

あとになつてそう言うたのは、その声のおかげでわたしが瓦礫の山の下にすることに気がついてくれて、わたしを孫と力を合わして救い出してくれた黒川でした。黒川と孫はまさにわたしの生命の恩人ですが、そう言うたあと、そのときのことをもう少し詳しく説明していました。

「はじめ、へんやで、下で何か音がすると言い出したんは孫やった。わしもそれで耳を澄ませたんやが、はじめはほんまのところ虫の声かと思うた。それからまた孫や。孫が、おじい、そいつはわしのことをおじいと言いよるんやが、おじい、ひよつとしたら、これ、人の声とちがうか。この下に生き埋めになつとる人の声とちがうか。女の人の声とちがうかと言い出しよつた。わしと孫も火に追われて逃げるとこやった。こんなもん、放つておけと思うたんも事実やが、孫がな、女の人が生き埋めになつとるんや、おじい、放つてはおかれへん、助けんといかんと言い出しよつて……」

それから黒川は孫と二人でわたしの救出作業にとりかかった。折よくそこに通りかかったのが、同じように火に追われて逃げ出して来たどこかの会社の社員寮の若い男の一人でした。その一人も助けに入つて、瓦礫の山の下、とりわけ太い梁が食い込んで下半身を金縛りにしていたわたしのからだを引っぱり出すことができた。そう考えると、わたしは誰をおいてもまず黒川の孫に生命の恩人としてお礼を言わなければならないのですが、孫はおじい、のその委細説明のことばのあとを、「おばはんの蚊の泣くような声が聞こえて来なんたら、ぼくら、おばはんを助けんとすんだんや」とわたしの顔を

見ながらぬけぬけ言うた。

野戦病院

とにかく間一髪でした。あと十分、二十分おそかったら、たとえ黒川と孫がわたしら（と思わずわたしは言うてしまうのは、フルーツ・パーラーの三人のことをわたしは考えてしまうからです。たしかにあの三人はわたしに加勢して叫んでくれていました。蚊の泣くようなものであれ加勢の声を出してくれていました）の声を聞いてくれていても、もうわたしを瓦礫の山の下から掘り出して引きずり出してくれるような時間の余裕はなかったように思います。あのお人ら自身が火に追われて逃げて来ていて、十分、二十分後にはそこらあたり、もうたしかに火の海になっていたのですから。火の海になつていれば、わたしはたしかに生きながら焼かれていました。何んの罪もトガもなしに瓦礫の山下で火あぶりにされていた。中世の西洋の魔女も何んの罪もトガもなしに火あぶりにされていたのやから、わたしはまさに現代日本の魔女でした。そうなります。

狭い通りに人がもみあうようにして火の海から逃げて行くのが、そのときのそこらのありさまやつたらしいのですが、二人にすぐかつかれて運ばれて行くわたしは、そのあたりのことは、ずっと喉が渴いていたので、とにかく水を飲ませて下さいと言ひ、誰がどこから持って来てくれたのか知りませんがハンゴウの蓋みたいな容器にいっぱいに入った水をガブ飲みするように一気に飲みほして、それですまらずと生きた気持がしたこと、生き埋めから出て来たばかりのわたしの眼を誰かが手拭いを

顔に巻いて護ってくれたことぐらい以外は何ひとつ憶えていません。「かつがれて」と言うのもありきたりのきまり文句の言い方で、そこらの瓦礫の山のどこからか拾うて来た古畳一枚の上にもまるでタシカのようにわたしは乗せられて、その両はしを黒川と孫とで持つて動いていたそうで、「おぼはん、あんたはほんまに重たかつたで。ことにおぼはんのお尻、ゆたかに肥えていはりまつしやる。ほんまに重とうおました」と病院にわたしを送り込んだあとで孫に言わせるとそういうことになる。

大通りに出たら、車やら人やらでもつとごつた返していました。人はまだ動いてもあちこち交通は途絶している上に、市内市外各地からいくらでも車はやって来ていて動きようがない、消防自動車の図体の大きいのがはさまつて立ち往生しているのが瓦礫の上で意識が朦朧としていたわたしにも印象的でしたが、かんじんの水が出なくて火の海の現場からその消防自動車は逃げ去る途中の消防自動車でした。「あれこそ無用の長物やで」と黒川が吐き棄てるように言うたのはわたしの耳に残っている。

もう夜になっていました。わたしはそのことに古畳のタンカで運ばれる途中で不意に気がついて、そう突然つぶやいて二人をおどろかせたそうですが、それで、助かつた、このおぼはん、正気によいようかえりよつたと二人はよろこんだ。それまで、わたしはまるで気がふれたように、いや、ほんとうにわたしは気がふれていたのにちがいありませんが、焼かれる、焼かれる、火あぶりになる、とずつと泣きわめいていたそうですから、二人がそうよろこんでもふしぎはない。

大通りの車と人のごつた返しのみなかで、ようやくわたしを古畳もろとも荷台に載せてくれる親切な小型トラックを二人が見つけてくれて、二人のつきそいで、あの病院はアカン、潰れてしもうとる、あつちのは途中への道が不通や、こつちはまあ行ける——の問答のあと、のろのろ運転ですがとにかく

く「まあ行ける」の病院に到着したのは、もう夜もだいぶまつての時刻やったと記憶するのですが、半潰れのそのの玄関に着いたとたんに、余震の大きなのが来ました。半潰れの玄関から慌てて人が飛び出して来るほどの大きな揺れでしたが、わたしは平気でした。なにしろわたしは生き埋め十二時間、もう少して火あぶりになるところを瓦礫の山の下から救い出されて出て来た魔女なのやから、何が起こつても平気や。もう何んでも起これ。わたしの気持はたかぶつていた。

余震より、かえつて病院のなかのさまがわたしをおどろかせた。わたしは病院に連れて行かれるのを古畳のタンカの上で知つて、ああ、それならすぐさま救急室か何かに運ばれて、白い衣の医者や看護婦やらに取り囲まれて注射やら点滴やらが行なわれる。そうとことは決まっていると勝手に思い込んで来たのですが、いざ着いてみると、まるつきり予想とはちがつていた。第一、そこは街なかのどこへ行つても同じでしたが停電でまつ暗、その暗いなかに人がぎつしりつまつていた。立つている人も床にじかに坐っている人もいました。が、玄関つづぎの廊下にはわたし同様古畳や戸板をタンカにして運ばれて来たのがすき間もなく並べられていて、そのあいだを懐中電燈を手にした白い衣の医者や看護婦やらが乱暴に歩いて診てまわつていて。これは、わたしがその廊下のすみっこにようやくくあいているところを黒川と孫とが見つけて古畳もろとも置かれたあとに、わたしが頭を上げて見まわして確認した光景でしたが、まわりにすき間なく並べられている被災者たちは誰も彼も着ているものはたいていパジャマやら泥やら汚れたネグリジェやらジャージのスポーツ・ウェアの上下やらで、どれもこれも血やら泥やら何かわけが判らんどす黒いものやらがべつとりついていて。懐中電燈を持つてあつちへ行つたりこつちへ来たりしている医者や看護婦の白い衣も、こんなことはふつう病院

では考えられないことですが、あつちこつちが血で汚れている。その血で汚れている白い衣にとりすがるようにして古畳や戸板の上で、先生、早う診てくれ、なんとかして下さい、わたし死にます、と口々に叫んでいるのですが、ふと見ると、若い先生自身が頭にケガしているのか、大きなホータイを頭に巻いている。

（野戦病院や）とふと思いました。ほんものの野戦病院なんかは見たことはありませんが、話には聞いていたし、子供のころ、写真や絵で見たこともある。人間の気持はふしぎなものです。そう思うと納得できた気になって、わたしは落ちついた。

ブツブツお経の文句らしいのを口のなかでつぶやいているおじさんがいました。首のところが切れて、血が滲んでいる。ハンニヤシンギョウとちがうかと耳を澄ましてみましたが、よく判らない。隣りのおじさんの人のいい顔をしたのが、わたしに「大きな地震やつたな。まるで夢やで。街も何もかもあらへんようになったし、病院へ来てもこんなんや」と声をかけてくれた。この人は自分も頭から血を流して、服も血まみれ、泥だらけになっているのに、「あんた、まだ診てもろうてへんのか。クスリもろくにこの病院にはもうないよつてちゃんとした治療はだけへんらしいが、それでも診てもらわんより診てもろうたほうがええ。気休めになる。あんた、とにかく頭やられとるんやろ。血が髪にこびりついとるで」とさらにつづけて言うてくれた。しかし、わたしとおじさんが話をするのが気になったのか、おじさんのつれあいの女が、「夢やない。これはゲームや」と口をはさんで来た。このヤキモチ女は見ただけでは判りませんが、からだのどこかにまちがいなくケガをしていました。さつき口から血を吐いていて、見るからに気分がわるそうでしたが、今は少し元気になったようでした。

た。おじさんが他の女と口をきいたので、かえって元気になったのかも知れませんが、しかし、ゲームとはうまく言うたものです。わたしは少し感心しましたが、そやけど、ゲームやったら、はよう、あんた、リセットのボタン押しいな。わたしは彼女に言うてやりたい気になった。

「あんた、あの音、聞きはりましたか」とおじさんがまた言うて来た。わたしがケゲンな顔をする、「地震のときに地の底からわき上つて来たみたいに聞こえて来た音ですがな」と言い、「あれ、えらい深い音やったで」とつぶけた。わたしはうなずいていました。たしかに、あれは深い音やったと、わたしはあらためて考えた。

野戦病院に来て、ひとつよかったと思うたことがあります。それは、ここではみんなが血まみれ、泥だらけの服装をしていることでした。服装と言うても、血まみれ、泥だらけのパジャマやらネグリジェやらジャージーの上下です。医者や看護婦の白衣にも血痕はいくらでもついている。わたしは運よいことにひとり暮らしのわたしがときどき気まぐれに着てみたりするレースのピラピラが派手についた新婚の若い女が着たがるようなネグリジェを着ずに、つい先日、近所のスーパーのバーゲンで買って来た木綿地とナイロンの混紡の縞柄のパジャマを着ていた。運よいことにわたしが言うのは、瓦礫の山の下にいるあいだに何度も洩らしていたからですが、洩らしたのは、出てしまうたのは小のほうだけやなかった。大のほうも数えて三度やらかしていた。それが黒川と孫に救い出されてからずっと気になっていたのですが、しかし、ここは野戦病院です。誰も彼もが血まみれ、泥だらけになっているのやから、なかにはわたしのように小ばかりやない、大のほうも出しているのもいくらでもいる。

つまらんことに気をつこうてもしょうがない。野戦病院には、消毒薬のきつい臭いに混じって生まぐさい血の臭いも泥の土くさい臭いも人間の臭いも人間の出すものの臭いも廊下にはりつめるぐらい溜まっていて、そのなかでみんなが血まみれ、泥だらけのパジャマやらネグリジエやらジャージーの上下やらを身によろよまとつてゴロリと寝ている。寝かされている。わたしもそのひとりにすぎない。

ひとりになった気がして来ていました。もうそのときには、瓦礫の山の下からわたしを救い出してここまで連れて来てくれた生命の恩人の黒川も孫も、わしらもうあんたをおいて帰らないかん、わしら自身が火の海から逃げて来たんやから、これからどこぞに今夜のねぐら見つけないかんのやと、また落ちついたら来たげるよつて、ここでとにかくもいつとき休んでいなはれ、ここもメチャクチャになつとるけど、とにかく病院は病院やと黒川がすまなそうに言い残して、わたしが礼を言うまもなく立ち去ってしまった。二人が立ち去つてから、わたしは二人の生命の恩人の名前も聞いていなかったのに気づいたので（「黒川」という名前はあとで知ったことです。ただ、黒川といつしよにいてわたしを助けてくれた高校上級生くらいの年の男の子が彼の孫であることは、もうそのとき男の子が自分でわたしに言うていたので判っていました）、二人がこれまでさっきのおじさんの言い方と言うたら夢、おばさんのこととはではゲームになることになる大地震のなかでのただ二人の知り合いだったということになるのか、二人が立ち去つたあと、わたしはほんとうにひとりでこの世のなかに取り残された気がしていました。

おかしな心の動きやつたと思う。瓦礫の山の下では、わたしはひとりで死んで行くのやと思うて、

ひどくきびしい気持がしたものでしたが、今度は、こんなふうになんか人がたくさんいるなかで、ひとりになった、ひとりになってしまったよって、もうひとりで生きて行かなあかん。そんな気持でした。

わたしの両親はもう亡くなっていましたし、ひとりいる姉は夫と子供といっしょに東京に住んでいましたし、ひとりで勝手に生きていると彼女が思うていはるわたしとは縁のない暮らしをしていたから、かわいい妹を探しにわざわざこの地震の土地へやって来て市内のまるでいくさの場みたいな大混乱のなかを野戦病院にまでたどり着くというようなことは、まず考えられんことでした。もとの夫の古谷は来るはずはなかったし、わたしのほうでも会いとうもなかった。店の客で親しい仲になった人も何人かいたが、今はみんながそれぞれに被災してここまでわたしを探し出しに来るはずはない。店の——と言つても、それこそひろびろとして明るいフルーツ・パーラーなんかとちがうておきまりの狭苦しい、薄暗いただの喫茶店ですが、その「レモン」という店の常連の客も、常勤の店員の小沢さんという中年の女性もアルバイトで来ていた短大出のヨシ子も、みんな、それぞれに被災して、自分のことにかまけているにちがいない。あれやこれやで、わたしが野戦病院でひとりになった気がして来た、それでひどくきびしい気持がしたというのは、べつにわたしの知人やら何やらに見放されてひとりでここに放り出されているというようなものではありませんでした。少し大げさに言うたら、人間はいくらたくさんがいっしょにいても、生きていても、結局ひとりなんやということ、それがよく判つたというものでしょうか。

「あなた、今日の夕方の空見はりましたか」とヤキモチやきのつれあいをもつたおじさんがまたきいて来た。きつきはわたしに深い音をきいたかと訊ねて来たおじさんでしたが、おじさんはちよつと顔

をあげて横に同じように仰向けに寝ているわたしの顔をのぞき込むようにして見ながら、「あれ、きれいでしたで」と、わたしが「見られませんでした」と答えるまえにつづけていました。ヤキモチやきはどうしたのかと、わたしも顔をあげましたが、便所にも行きはつたのか、姿を消している。あ、これでおじさん、わたしに安心して話しかけて来よつたのかとお里が知れた気になりましたが、おじさんは夕方の空がきれいかったことをかわらずしゃべっていました。わしは五十何年生きて来たが、あんなきれいな夕方の空を見たことがないと言う。人間がつくつたもの、そこでゴチャゴチャと生きて来たものを自然が一律に叩きつぶした、それで人間やら人間のつくつたものやらのややこしい夾雑物がみんなきれいなサツパリ消えて自然がまともに姿を出して来た。そのまぜものなしの自然に人間がじかにつながつたんや——おじさんは、たぶんこのあたりに多いケミカル・シューズの小さな工場でもやっていて毎日銭勘定に明け暮れていた、そうとしか見えない顔で、自然とか人間とか、夾雑物とか、そんな顔にまったく似つかわしくないことをば使ってしゃべっていた。そう言えば、さつき地の底からの深い音を聞いたかとわたしに突然言うて来たときにも、わたしは同じようなことを考えていたのですが、おじさんの話はそれきりで終つてしもうた。こわいヤキモチやきのつれあいが戻つて来て、あんた方、何をしゃべつとつたんやとでも言うふうにおじさんとわたしの顔を等分に見くらべるようにして見ながら、おじさんとわたしのあいだに割つて入るようにドサリと腰をおろした。わたしはおばさんに、あんた、ゲームのリセットのボタン、もう押したんか、と言ひ出しかけた。

口から出かかったそのセリフをわたしが言わなかったのは、ようやくわたしの順番がまわつて来て、血痕のついた白い衣の医者と看護婦がわたしのそばにうづくまるようにして中腰になって、わたしの

診察を始めたからです。医者はずつきの頭にホータイをした若いのかわつてわたしと同年輩か、それよりもつと年をとつた医者になつていましたが、無愛想な医者でした。廊下に寝ているのを次から次に診て歩いてくたびれ果てていたのも事実でしょうが、あんた、どうしはつた、と不機嫌な顔できて来るので、生き埋めになつてずつと長いあいだ瓦礫の山の下にいた、やつとさつき救出されてここまで運ばれて来た、もう少しのところで生きたまま焼かれるところでしたとわたしが事実があるがままだまに落ちついた言い方で答えても、それはたいへんでしたなとも何も言わず、わたしのパジャマの胸をあけさせると型通り聴診器をわたしの胸に当てた。看護婦も医者に輪をかけた無愛想な女で、医者を手伝いながら、みんな、たいへんですがな、と横から口を出した。あんただけがたいへんやないのやと言いたげなことばでしたが、わたしはべつにグチもこぼしたのでもないし、まして生き埋めになつたあげくに火あぶりになりかけたわたしのことをかわいそうと思うてくれ、同情してくれと言っていたのやない。それでもわたしとこちらも同年輩の看護婦は怒つたようにプリプリした声でそれだけのことばをわたしにぶつつけて来た。

しかし、わたしはそれだけでも医者について診てもらえたことで安心したにちがいありません。それまでの緊張がいつぺんにほぐれて、ひどく眠うなつて来た。いくら野戦病院でも瓦礫の山の下でないので、ここではいくら眠つてもそのまま死んでしまうのやない。そういう安心感があつたんでしょう、わたしは診察半ばでもう眠り始めていました。医者がそのわたしの状態を的確に見てとつたように「この女の人、大丈夫や。頭のケガはたいしたことない。ただ、この人、朝から何も食べていよらんし、からだも弱つとる。点滴やつて、安静にして眠らせておいたらええがな。まあ、今夜は点

滴で栄養補給しといて、明日朝に重湯かお粥あげればよいやろ。点滴やる言うても、病室はどこもいっぱいやろ。この廊下に道具持つて来てやらんとしょうがないな」と看護婦に言うているのを、わたしは半分すでに眠りに入りながらぼんやり聞いていました。いや、医者がそう言うたあと、ふと思いついたように「まるで、ここ、野戦病院やで」とつけ加えて言うたのもぼんやり憶えています。「そんなら先生が軍医長殿で、わたしが従軍看護婦の婦長殿ですか」と無愛想な看護婦は笑いもしないで大真面目に受けていました。ふだんならこんな漫才めいたやりとりは不機嫌ではできないことですが、二人は真剣に大真面目にやっていた。

この野戦病院の軍医長殿と従軍看護婦の婦長殿とのやりとりを聞きながら、わたしは眠りに落ちていました。深い、深い、しかし、このまま死んで行くことのない安心な眠り。その眠りのなかへ地震後はじめてわたしはズシリと入った。

この世のことはこの世のこと

眼を覚めたのは、翌日の朝でした。

廊下の野戦病院にまだ寝ころがされているとつきに思うて、おそろおそろ眼を開けると、うれしいこと、ありがたいことに病室のなかでした。二階の六人部屋の病室のはしっこ、扉のそばの寝台にわたしはいて、そばの柱に下げた点滴の容器に左腕はしっかり管で結びつけられている。ちよつと頭を上げて病室のさまを見まわそうとした拍子に腕が動いて管でつながった柱が危うく倒れそうになっ

た。隣の寝台に寝ていたわたしよりはるかに年下の若い女の子がすばやく起き上って支えてくれなかったなら、柱は容器もろとも倒れていました。身軽な動作で起き上ったのやし、べつにどこぞにケガしているふうにも見えませんでしたから、おおかた地震のまえからこの病院に病人として入っていた子やと見当をつけましたが、わたしが横になったまま顔をその子にむけて「すみません」と小声で言うのと、「おばさん、よう眠つてはった。大きいイビキをずっとかき通しかいてはった」とハキハキした言い方で言い出した。顔のむやみと大きい子で、眼、鼻、口の顔の造作も大きい。お多福みたいな子やと思うてから、これは昔風の言い方やと考えた。その造作の大きい顔で大きな口をいつそう大きくひろげるようにして顔の目いっぱい笑うていた。その人見知りをまったくしない慣れ慣れしい口のきき方はわたしのカンに少々さわりましたが、彼女はわたしの内心の動きなんかにはまったくトン着しないで、「うち、おかげで、ずっと眠られへんかった」とつぶけた。わたしは（何んや、この子は）と怒るよりかえって呆れてまじまじとその大きな顔を見返したのですが、「ほんまにそうやったんやで」と今自分が口にした文句をもう一度確認するように言ってみせた。救いは、彼女の笑顔でした。まさに大きな笑顔で、そのくつたくなかない笑顔を見ていると、いやでもわる気がないことが判る。わたしも仕方がないので笑い返した。

「木下芳美」——わたしは笑い終ると、彼女の寝台のワクに取りつけてあった名札の文字を声をあげて読みました。「橋本園子」と、彼女もわたしの寝台の名札を読み上げた。二人の名札の読みあいっこがなんとなく面白かったので、わたしも彼女ももう一度笑い出していました。その笑いで、二人のあいだのへつきりはとれて、二人は近づき合うたような気がします。「あんたは地震でわたしみたい

にかつぎ込まれたんところがいますやろ。地震のまえから病気でこの病院に入つてはったんやろ」と彼女——木下芳美の素姓調べをするみたいにきいていました。

わたしのこの素姓調べで、その通り木下芳美は地震でケガしたのやのうて、ただの盲腸炎手術で病院に入ったあと、傷口が膿んで予定より長く入院して来ていて、おかげでここで地震に遭うた。ここもよう揺れた。ほんまにこの病院、倒れるかと思うた。それでももうあと二日で退院することになつているという彼女の素姓が判りました。「手術の傷口が膿むというのんは今日きょうび珍しいことやないの。あんたの体質が膿む体質とちがうんか」と彼女の話を聞いたあとわたしが言う、「それよりこの病院の医者がヤブやからとちがう」とまたへらず口をハキハキした口調で言うてのけた。

わたしの彼女についての素姓調べのあとは、彼女のわたしについての素姓調べです。「おばさんは家が壊れたあと、ずっと生き埋めになつてはつたらしいけど、それ、ほんとう？」とまず訊ねて来ました。「ほんとうや」とうなずくと、「そのあいだ、何考えてはつたん」と大きな顔の大きな眼をさらに大きく円くしてわたしをふしぎな生き物でも見るように好奇心に満ちあふれた表情で見ながらきいた。

「これからどうなるか、いろいろ考えてはつたん。」

「いろいろなんか考えてへんがな、もうこれでわたしはこれから死ぬやろうと考えていた。」

「何してはつたん。」

「お経の文句となえていた。」

「何んのお経。」

「ハンニヤシンギョウ。」

「うち、それ知ってる。」

大きな、お多福の顔が輝いて、大声を出した。「それは、うちのおばあちゃんがようブツダンのまえでとなえてはった。」そんならわたしも同じやと思うた。

「あの世が見えて来はった？」

唐突にお多福顔が訊ねた。おばあちゃんが、ハンニヤシンギョウとなえていたら、あの世がありありと見えて来るとよう言うていたと言うのでした。わたしは言うた。

「あの世は見えなんだけど、フルーツ・パーラーが見えて来た。」

「フルーツ・パーラーで、それ、何。」

とつぎに思つた通り、今どきの子です、お多福顔はきいて来ました。フルーツ・パーラーというのは、喫茶店みたいなところやけど、喫茶店とちごうて、大きな果物屋の奥にあつて、その店の果物をジュースにかけてフルーツ・ジュースつくつて飲ませるところやけど、今は街のどこへ行つてもあらへんな……というような説明がゴチャゴチャ頭のなかに出て来ましたけど、わたしの口から自然にスルスルと出て来たことばはまるつきりちごうていた。

「ひろびろとした明るいところや、そこに二人、子供がいて、フルーツ・ジュース飲んどるんや、お母さんも飲んでいた。」

それだけことがまるで自分の心と意志をもつとるみたいに自然に口から出て来たのですからふしぎでした。お多福顔——木下芳美は呆氣にとられたようにわたしを見ていましたが、何をどうきいた

らいいのか判らんかったにちがいない、黙っていました。わたしはつづけた。いや、ことばが勝手に自分でつづけていた。

「そのひろびろとした明るいところに地震が来たんや。アツという間に暗闇や。屋根も梁も天井板も壁も落ちて来た。三人はすぐ……まっすぐ生き埋めや。生き埋めということはな、芳美さん……」

わたしはお多福顔を名前で呼んでいました。これも自然な勢いででした。自然な勢いでわたしはつづけていた。

「生きているということですがな。わたしも生きていましたがな。暗闇のなかでな、わたしは生きていたからこそ、助けてくれ、と叫んだんや。そしたら、フルーツ・パーラーの三人も生き埋めになるとるやろ、三人は三人でわたしのうしろでわたしと同じ文句叫んでいよりましたんや。これで三人にわたし、四人でいっしょに叫んでいたことになりましたやろ。いっしょにと言うたかて、はじめからそんなこと決めていたんやないんです。みんなはそれぞれにおのれひとりの生命助かろうと思うて必死になつていたんや。おのれひとりが叫んでいるつもりやつたんが、四人で力をあわせていっしょに叫んでいたことになった。……四人でいっしょに叫んだからこそ、声が大きくなって瓦礫の山の外にまで聞こえたんやで。」

「聞こえたよつて、おぼさんは助けられはつた。」

お多福顔——芳美はわたしの話につき穂をつけるように口をはぎみましたが、あれは、わたしの信じがたいわけの判らぬ話の腰を折るためやつたかも知れません。

「そうやで。」

とわたしは大きくなすぎました。あまり大きなうなぎやつたので、からだが動いて、また、腕に管でつながった点滴の柱が傾きましたが、それは芳美がまた身軽に寝台から立ち上って支えてくれた。さつきから芳美はもう寝台に横にならずに腰をおろしてしゃべっていました。

「わたしは何もあんたにわたしの話を信じてくれと言っているのやないのやで。」

わたしはあらためて言うた。わたしは、わたしが何んで救われたのかと言うと、今話した通りのこととしかないから話している。そうわたしは念を押すようにつけ加えていました。

「そやけど、園子さん、園子さんのその話、何んの意味があるんやろ。園子さんはどう自分で考えはります。」

しばらく黙り込んだあとで、芳美は突然真面目くさった顔で訊ねて来ました。「園子さん、園子さん」と気やすげにわたしの名前を呼び出したのは耳ざわりでしたが、これはさつきからわたしはわたしで「芳美さん」と相手を呼んでいるのでお互いさまです。そうわたしは納得しましたが、芳美は「園子さんの話聞いているうちに、うち、園子さんの話には、園子さんが救われはったということのほか、べつの深い意味があるように思えて来ましたんや。それでおきするんやけど、園子さん、ほんまにどう思いはる」とつづけていました。芳美はわたしの顔をまた大きなお多福顔の大きな眼でまっすぐに正面きつて見すえるようにして見て、一語一語を考え込みながら口にするようにしてえらい真剣な口調でしゃべっていました。芳美のもの言い方には、小さな女の子のように舌足らずなひびきがあることにわたしははじめから気がついていて、これでこの子は男の心をくすぐる、いや、実際にこれまでせいだいくすぐって来たにちがいないと判断をつけて来たのですが、舌足らずのそのひびきは、

口調が真剣になるといつそうきわだつて来るようでした。

「さあ、何んの意味があるんかしら。そんなこと、わたしは考えたことあらへんけど……」

わたしは口ごもりしばらく黙り込みましたが、そう黙り込んで考えたのがよかつたのか、そのうち心がふつと開けて、ふと口をついて出た「それは、芳美さん、この世のことはこの世のことで、現世のことは現世のことでやれ、やりなさいということとちがうかしら」ということを皮切りのようにして自然にことばがスルスルとは行かずとぎれとぎれでしたがひとつのつながりをもつて出て来ました。……お経のようなあの世へ行くのに便利な手引きみたいなありがたい文句を口でいくらとなえてみても、あのとき、わたしに見えて来たのは、ゴクラクにしる地獄にしる、あの世のさまでなくて、フルーツ・パーラーというまぎれもないこの世、現世の場面やつたのやから、これはほんとうにこの世、現世のこと、この世、現世で起きたことはこの世、現世でやれ、解決が必要なら、この世、現世で解決せエ、よしんば解決できのうても、その努力を精いっぱいせエ、しろ、ということやないかとわたしはつづけて言うていた。いや、もうひと言、ことばの自然な流れのようにして、この世、現世には誰がいはる、わたしら人間しかいないのやから、人間が努力するよりほかにない……そう言われとるような気がすると、何かお説教する坊さんやら牧師さんやらのえらそうなことばを言うているような気恥ずかしい気持が言うているうちにして来てやめようかと思うたのですが、ことばの自然な流れでわたしはそこまで言うていた。

「何んや、園子さんはえらい論客やないの。カッコいいこと言わはる。テレビに出はつたらええ、いけますで」と芳美は自然にたかぶつて来ていたわたしの気持に水をかけるように呆れたような声を出

して皮肉な口をききましたが、それなりに感心しているふうにも見えた。

「生き埋めになつて死にかかつたんや。焼け死にしかかつたんや。ちよつとぐらいいいこと、カッコいいことを言わせてもらわんともとが取れませんで」とわたしは少しおどけた言い方でしたが、そのわたしのことを無視するように、芳美は、「園子さんをただの喫茶店やつてはる人やとうち思うていましたら、たいへんな掘りだしもんや」とあいかわらず皮肉をつづけるように言うたあと、「園子さんのそのお店、レモン言うたんちがう？」と思いがけないことを口に出していました。

あまり思いがけないことばやつたので、わたしは奇妙に慌てましたが、それでもすぐ態勢を立てなおすように、何んでまた、芳美さんはそんなこと知つてはりますねんと訊ね直した。べつに深いわけがあつたんやない、と芳美は笑いながら応じてから、うちは園子さんのお店、レモンで今アルバイトで働いているヨシ子を知っていますんやとつづけた。そう言うてから、あれは生まれつきのグウタラのうちとちごうて働ぎ者の子やけど、うちは昔からの知り合いですねんと芳美は少し口調をかえてひと言つけ加えた。

「レモンのへんどうなつていんやろ。」

そのあとわたしはまず訊ねていました。昨夜の一階の廊下の野戦病院で人がワイワイガヤガヤやつてゐるのを聞いてゐるうちにどうやらそのへんはたいして被害がないというありがたい情報が耳に入つて来てわたしは少しは安心してゐたのですが、まだ現場へ行つてみていないのでほんとうのところは判らない。ここを出たら、何をおいてもすぐ行つてみようと考えていた矢先のことでした。

「知りません。」

芳美は突っぱねるような言い方をしました。

「ヨシ子はどないしているんやろ。」

わたしは、芳美の知り合いだという、それが芳美のことばで判った、アルバイトで使っていた蒼白い顔のいつもまるで元氣のない娘のことを口にしました。心配でないこともないが、そんなアルバイトの女の子のことまで気づかってみても仕方がない。心配するなら、常勤の小沢さんのほうを心配しないといかんのですが、そちらのほうも、この非常事態です。案じるのはまずおのれひとりのこと、おのれひとりの生命のことです。それでも、わたしはもう一度、ヨシ子のことを口に出した。「あの子もどぞでこの地震に遭うていはったんやろ。」

「そうやで」と芳美は大きくうなずいた。「昨日の午後、ほんま言うたら、園子さんあの子はうちを見舞いにこの病院にやつて来ることになつていたんや。そやけど地震ですやろ。それで来よらんかったんやけど、どないしとるんか。あの子はうちとちごうて、あの子のお父さん、お母さんのところに住んでいるんやけど、家、どうなつているか。ヨシ子の住んでいるへん、被害甚大やと言われとる地域や。火も出たらしいんやけど、ヨシ子も家の下敷きになって死んどるんか。それとも、園子さん、おばさんみたいにおばさんの言いはるように生きながら焼かれよったんか。」

その言い方がへんに冷淡なものにわたしの耳にひびいたので、わたしは少しムツとして、「あんたのおうちは大丈夫やつたんかいな」と言い返すようにきいた。

「まず、うちは今ここにいて、園子さんとこうやつてしゃべっているんやから、これは大丈夫。うちの家は、今うちが住んどるんは四階建てのワンルーム・マンションの安もんやけど、部屋のなかはど

うなつとるんかは判らんけど、倒れてはおりません。とにかく、倒れずに立つとる。これは昨日、園子さん、おばさんがちょうど生き埋め、焼け死にを免れてここへ運んで来られたところにやって来たうちのボーイ・フレンド……もつと正確に言うたらそのひとりが報告してくれはったことで、園子さん、まず、まちがいありません。」

そうぬけぬけと、また、途中、芳美は何度も「園子さん」を連発して馴れ馴れしくしゃべってから、自分がしゃべったことのなかで何がそんなに面白かったのか、お多福顔の大口をさらに大きく開いて笑っていた。笑うと、白い歯の歯ならびのよいのがきわだつて、なるほどこのたいして美しくもない子が舌足らずの言い方とともにこうした魅力をもっているの、ボーイ・フレンドを何人もつくることのできるのやろとわたしは感心していました。それで地震のあとの大混乱のシュラ場をわざわざこの子のワンルーム・マンションまで被害を見に行つてくれるのも出て来るにちがいない。

「そやけど、ご両親は……」とわたしはきいていました。

「ご両親は……」と芳美はわたしのことをそのままおどけて引きとつて、あとは、もともと芳美は四国、高知の出身で、短大に入るときにこつちに来た。ヨシ子は、彼女も同じ短大に入つて来たのでそこで知り合ったそうですが、ご両親は、兄貴、妹とともに高知にいる。「あそこは地震ありませんでしたやろ。園子さん、そやからあの人は大丈夫。」お多福顔はまた何がおかしいのか、少し耳について来た舌足らずな口調で言うてから、歯ならびのよい白い歯の笑いをまた少しのあいだやつてみせたのですが、急に笑いやめると、重大なことを突然思い出したように、「それでうちのお父さんやお母さんらは、あのこわい音を聞かんとすんだんや」と怯えた声を出して言うていました。「こわい

音で、何んや」とわたしは訊ね返しましたが、芳美の声につられたのか、わたしの口からも怯えた声が出た。

「園子さん、あのとき、揺れが始まったとき、外で地鳴りの音がしましたやろ。大きな地鳴りの音や。うちは見てへんけど、この部屋の窓のそばの人は蒼白い光がまっ暗な空に走ったんが見えたと言うていはる。園子さん、あの地鳴り、あれはほんとうにこわかった。園子さん、その地鳴り、聞きはれへんかった？」

「聞きましたで」とわたしは答えていました。「あれはほんまにこわい、深い音やったで。ゴウツと深い地の底から聞こえて来ましたで。」わたしは怯えた声でつぶけた。

ブンカにひとりで住んでいた男

看護婦が二人のあいだに割るように入ってきて、横の柱に吊るした点滴の容器を取り換えてくれました。そのあとすぐ朝食——それを水道の水は出ないし、ガスも不通、電気も非常用の自家発電のはべつとして停電、なけなしの貯水タンクの水と非常用のボンベのプロパンガスでやっとこれだけこしらえましたというのですませる。わたしは重湯だけなので、かえってよかったようなものです。同室のあと五人は、芳美をふくめて彼女同様の地震のまえからここに入ってきているふつうの病人ばかりで、地震でケガしたり急病になったりしたのは、みんな、かわいそうにまだ下の一階廊下の野戦病院のなかに詰め込まれていて、この二階の病室と下の野戦病院とでは天国と地獄のちがいがあ

しかし、それでも、あとで聞いた話ですが、地震のあと、わたしの生命を救ってくれた黒川もそうでしたが、被災したあと、家を失のうて行きどころがなくなって大挙して被災者がつめかけた小学校やら何んやらの避難所ではまず食糧の準備は何もなかったということでしたから、たとえばパンひとつ、おにぎり一個でも何か食う物があるだけはおにぎりかましでした。避難所にかなりの日数のあいだいた黒川の話では、避難所でははじめはほんとうに何もなくてバナナ一本を三家族で分けた、それももらえなかったのは、明日ももらえることにして、そのしるしに短かいリボン一本もろうたというのでしたからひどいものでした。もちろん、そんなところには、毛布一枚の準備もない。やつと持ち出して羽おつて来たコート一枚にくるまって寝たというのですから、これはまさに「棄民」、わしらはまったく棄てられる民やったで、と昔の人間らしく何ごとにも辛抱強い、たいていのことなら何んでも耐えてみせるさすがの黒川も疲れ果てた言い方で言うてた。

手洗いもそうでした。野戦病院にかつぎ込まれてから、わたしは人間は排泄する動物や、どんなきれいごと言うてもそうや、そやから手洗いいうものが人間には必要なんやと思うていたのですが、それと言うのも、これは上の病室も下の野戦病院も、水道の水が出ない、そやよつて手洗いの水が出ない——で大騒ぎになっていたからです。はじめは水が出ないままにやつていたらしいですが、なけなしに貯蔵して来た水もそつちには使われないので、そのうち「大」も「小」も便器がつまってえらいことになって来る。仕方がないので、上の病室も下の野戦病院も廊下のひとすみについたてで仕切つた一面をつくつて、そこにバケツまがいの容器を持ち込んで「大」も「小」も区別なしにやつていましたが、そのうち、ついたてから「大」をふくめてバケツからあふれ出たもの、そこからこぼしたも

のが流れ出すというおそろべき事態になっていました。

それでも、避難所にくらべれば、はるかにましやったで、と避難所から病院にやって来ていて、二つの施設の比較ができる黒川はまたつくづくとした口調で言い、わしのいた避難所の小学校の便所は、「大」「小」のたれ流しで足の踏み場もあらしまへんでしたとわざとへりくだった口調で話にしめくりをつけた。

なけなしの、それでも避難所にくらべればそれれまじな食事をわたしをふくめてわたしの病室の六人はすませ、手洗いのほうも長い列をつくつてとにかくすませたあと、ほんまに次から次へケガ人が来よるで、死人も来よつたで、もううちの病院はほんまにクスリものうなつて来たよつていよいよお手上げやでと、大声でわめきたてるようにしてしゃべりながら院長先生が看護婦ひとりを連れて回診にやって来た。聞きおぼえのする声やったのでよく見たら、昨夜おそくに下の廊下の野戦病院でわたしを診たあの無愛想な医者——野戦病院の軍医長殿でした。看護婦は昨夜おそくの従軍看護婦の看護婦長殿よりひとまわりは若い看護婦でしたが、昨夜の看護婦長殿よりさして愛想のよい女ではなかった。

院長先生、軍医長殿の今日のみたては、彼の昨夜のをそのまま引き継ぐようにしての、「ほんまにあんた、ようなりはつた。今日いち日、点滴やつて元気回復しはつたら、明日はもう出られる、まぢがいのう出られます」でしたが、そのあと、「出られる言うより、出てもらわんと困るねん。クスリはあんたのこの点滴のクスリふくめてもうあらかたなくなつて来ていよるし、地震のケガ人や病人やらがつめかけて来ておるんで、このベッドも空けてもらわんといかんのや」とまことに正直、あか

らさまざまなことばを口にした。「おたくさんはとにかく健康なからだもつていらつしやいます」と看護婦が院長先生、軍医長殿のことばをうら書きしてみせるように横から口を出した。そのあと「そのおかげですがな、おたくさんがはよう家に帰りはれるのは」とひとことばの間をおいてつづけていたが、いったい、どこへ帰れと言いはるんですか。わたしの家はもうまったくこの地上から姿を消している。

軍医長殿と看護婦が立ち去ると、それまで黙り込んでいた、いや、黙り込まされていた芳美がまたおしやべりを始めていた。さつき廊下に出たときに聞いて来たというどこぞの地域で何十人が死んだとかあつちでは何百人も死んでいるとか、あまり愉快でない話を得々と口からくり出していましたが、それは幸いなことにすぐ終つて、あとは彼女の好きな何んとかいう歌手の噂話、行つてみたい外国の話、この地震が落ちついたら早速にもツアーの予約をするつもりだというような地震そつちのけのラチもない話を次から次へやり出して、わたしはいいかげんウンザリして来ていたのですが、それでもいいことは、もし、芳美がそんなラチもない話を長々とやってくれていなかったら、わたしはいいからどうかどうするのか、どう生きて行けばよいのかと寝台にひとり横になつてあれこれ思い悩んでいたのにちがひなかつたからでした。

そこへ病室に入つて来たのが、わたしの生命の恩人の黒川でした。いや、まだ、そのときには、彼の名前が黒川であることは知っていませんでしたから、生命の恩人が入つて来た——にしておきますが、実はそのときわたしは入つて来た男が昨日わたしの生命を孫といつしよに助けた上にここまで運んで来てくれた男であるとは思っていませんでした。誰か見知らんへんな小男が入つて来

た——ぐらいに思った。それほど男が見ばえのしないただの小男に見えていた。

野球の帽子をかぶっていました。正式に何んと言うことになっているかわたしはいまだに知りませんのでそう呼ぶことにしているのですが、野球監督やら野球の選手がかぶっているのを写真やら何やらでよく見ているうちに今は誰もがかぶるようになったフェルト地か何かのヒサシつきの帽子ですが、その野球の帽子にどこかの会社の社名の入ったのをかぶって小男は入って来ると、壁に立てかけてあった折り畳み椅子を持って来てわたしと芳美のあいだにまさに割って入るように置いて腰をおろした。わたしが少しギョツとしたのは、その折り畳み椅子がああフルーツ・パーラーの場面に出て来たのにそっくりの折り畳み椅子やったからですが、そのあとわたしはいつたいこの人何者やとまじまじと彼を見ました。まじまじと見ても、わたしは彼がわたしの生命の恩人やとは気がつかなかったのですから、これはわたしのほうがよほどどうかしていた。

わるいことに「どうや、ぐあいは」と野球の帽子の小男は馴れ馴れしげに話しかけて来ていました。お多福顔の芳美にさつきから馴れ馴れしげにやられて来ていいかげん頭に來ていた矢先でしたので、もう少しのところ、「おたくさん、誰」と声をあげそうになったのですが、先方も気づいたのにながさない、「ひと晩寝て、あんた、忘れはったんか、忘れてくれはつてもわしはかまわんが、わしは生き埋めめあんたを昨日助けて、ここまで連れて來たんや」とべつに憤慨するふうもなく淡々と言うてのけていた。

慌てたのはわたしです。「へエ」とため息するような声を出して、「忘れてなんかいませんですが、人ちが良かったかと思いましたが」と弁解がましく言い、「もつと大きい人やと思っていました。そう憶

えていました」としどろもどろになつてつづけましたが、「大きいのはわしの孫や」と逆に言われてしもうた。しかし、黒川は——いや、まだそのときは名前を知らなかったたので、生命の恩人と言うときますが、生命の恩人はわたしのことばなど気にもとめていないふうに「あの子は大きい子や、まだ中学一年生やのに、高校三年生ぐらいに見えよる。いや、どうかすると大学生にまちがわれよる」とひとりで勝手にしゃべっていました。

「そやけど、あんたはあの孫のおかげで生命を救われましたんや。まず、あいつが瓦礫の下からのあんなのかぼそい声を聞きとつてくれよつた。それからあいつは大男や……大男の子供やから、馬鹿力がある。あの馬鹿力がなかつたら、あんたをとうていあの生き埋めの現場から引っぱり出すことができへんかつたとわしは思うで。あのへんの会社の寮の若いのが何人か来てくれよつたことは事実や、しかし、あいつらはみんなあのととき逃げ足だつていよつたし、今の若いのは、いっぽし見ばえはようでも底力がないのが多いのんや。そこへいくと、あいつは、何んでも知らんけど底力をもつとる。えらい底力をもつとるこわい子や。わしは、やつぱり、あの子がいたよつて、あんたは助かつたと思うね。助かつて、今ここでこの子と……」生命の恩人は横の芳美をアゴをしゃくり上げて指していた。「仲ようしゃべつておられると思うね。」突然見知らぬ、得体の知れない男のことばが自分に降りかかつて来たので、芳美は首を大仰にすくめていました。わざとらしく芳美がやつてみせたのか、それともほんとうに何か怯えて自然にそうしたのか、そこはよく判りませんでした。生命の恩人の声には静かにしゃべりながらもそれだけきびしいものがこもっているような気がしたのは事実です。芳美もそのきびしいものを感じとつたのかも知れない。

つづきは製品版でお読みください。